

# 日本種苗新聞

## 予冷施設の準備完了

### 「2024年問題」始まる

トラックドライバーの「2024年問題」がいよいよ始まる

トラックドライバーの「2024年問題」がいよいよ始まった。青果育種研究会は2月27日、北九州市中央卸売市場内(同市小倉北区)に建設された青果物を低温管理できるストックポイント「Marukita Logistics Base」(丸北物流拠点・通称ロジベース)を見学した。

ストックポイントとは産地から消費地への輸送の際の一時保管施設。ストックポイント機能と品質管理機能を備えたロジベースは、北九州青果(百

合野博社長)が国の補助金を活用して約15億円を

種類に合わせた5℃と2℃の2種類の冷蔵庫を備えている。

食品物流はトラックによる輸送が98%を占めているが、ドライバーの働き方改革と入出不足で長距離輸送が困難になってきている。そこで、九州各地の青果物をロジベースに集約し、フェリーを使って輸送する「モーダルシフト」の導入が始まっている。

かけて建設、昨年9月に完成した。

鉄骨延べ約7000㎡の平屋建物内の温度は荷さばき場が15℃、青果の

青果物の大産地の九州から遠隔の大消費地の関東や関西圏に新鮮さを保持したまま運ぶにはストックポイントでの中継が必要になる。さらに、海外展開の見込める九州に近いアジアへの円滑かつ効率的な青果物流通への整備も欠かせない。

一方、夏場は関東近辺の野菜もストックポイントを利用して九州に押し寄せてくる懸念もある。九州での廃棄も心配されている。

北九州青果野菜一部の谷口透部長は「われからは温度管理ができる荷さばき場での品質のチェックをしっかりと、自信を持って関東などへの販路拡張ができる体制づくりが必要」と述べた。



丸北物流拠点「Marukita Logistics Base」